

訳語によって起る新約聖書用語 の屈折について (3)

加藤 邦 雄

引用文献略記

本文中に比較的多く引用する文献を略記するが、これ以外の文献を引用する時はその都度明記したい。

1. Syr……………The New Testament in Syriac (Peshitta).
2. Del……………Delitsch's, Hebrew New Testament.
3. Jenn……………Jennings', Lexicon to The Syriac New Testament (Peshitta).
4. Smith……………Smith, A Compendious Syriac Dictionary.
5. Chald……………Levy, Chaldäisches Wörterbuch.
6. Talm-Midr……………Levy, Wörterbuch über die Talmudim und Midraschim.
7. Dalm……………Dalman, Aramäisch-Neuhebräisches Handwörterbuch zu Targum, Talmud und Midrasch.
8. Ges……………Gesenius, Hebräisches und Aramäisches Handwörterbuch.
9. Köhl……………Köhler-Baumgartner, Lexicon in Veteris Testamenti Libros.
10. ThWNT……………Kittel, Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament.
11. Hatch……………Hatch-Redpath, Concordance to The Septuagint.
12. Lisowsky……………Lisowsky, Konkordanz zum Hebräischen Alten Testament.
13. Liddell……………Liddell-Scott, Greek-English Dictionary.
14. Bauer……………Bauer, Griechisch-Deutsches Wörterbuch zu den Schriften des Neuen Testaments und der übrigen urchristlichen Literatur.
15. Thayer……………Thayer, Greek-English Lexicon of The New Testament.
16. Cremer……………Cremer, Biblico-Theological Lexicon of New Testament Greek.
17. Lewis……………Lewis, A Latin Dictionary.
18. Oxford……………The Shorter Oxford Dictionary.
19. OxfEty……………The Oxford Dictionary of English Etymology.
20. Kluge……………Kluge, Etymologisches Wörterbuch.
21. Paul-Betz……………Paul-Betz, Deutsches Wörterbuch.
22. Littré……………Émile Littré, Dictionnaire de La Langue Française.
23. Dauzat……………Dauzat-Dubois-Mitterand, Nouveau Dictionnaire Étymologique.
24. Concord……………Concordantiarum scriptorum Biblicum.
25. Vulg……………Biblia Sacra (Vulgata).
26. Luther……………Luthers-Bibel.

27. Biblia Germanica……Biblia Germanica 1945 (Die Bibel in der deutschen Übersetzung Martin Luthers Ausgabe letzter Hand)
28. Menge……Die Heilige Schrift übersetzt von Menge.
29. Zürcher……Zürcherbibel.
30. AV……The Authorized Version.
31. RSV……The Revised Standard Version.
32. NEB……The New English Bible.
33. TEV……To-day's English Version.
34. Jérusalem……La Sainte Bible traduite en française sous la direction de L'École Biblique de Jérusalem.
35. Crampon……La Sainte Bible du Chanoine Crampon (Nouvell édition 1960)
36. LXX……The Septuagint.

PISTIS

ローマ書10：8に口語訳で「信仰の言葉」to rhēma tēs pisteōs なる語がある。Vulg は *verbum fidei*, Luther, Menge, Zürcherbibel などは *das Wort vom Glauben*, AV, RSV, NEB は *the word of faith*, Jérusalem, Crampon は *la parole de foi* と、Del は *dabar ha-emunah* と訳したが、パウロの用いた「信仰」なる語は言うまでもなく、ギリシヤ語の *pistis* である¹⁾。

【註1】 *fides* と *foi* と *faith* とはラテン系統に由来する。その動詞の形は古くはギリシヤ語の *peithein* と姉妹の関係にあって—*peithein* から「信ずる」を意味する *pisteuein* が出来た—いずれもサンスクリットの *bandh* すなわち *unite* を意味する語にまでさかのぼる。*unite* から *trust* になり、「信じる」の意味に変わった。これに反し *Glaube* は *glauben* なる動詞から変化したが、英語の *belief* や *believe* とも親類関係にあって、古くは、*lieb*, *lauben*, *loben* などとの関連をもっている。「信じる」はその意味で最初は、「好意をもつ」「気に入る」「ほめる」などの意味をもつ語に由来したのであるから、ものの存在を確信すると言うことよりも人と人との心の関係を示す語であった。それ故に、*fides*, *foi*, *faith* の系統も、*Glaube*, *belief* の系統も共に元来は、「確信」よりは、むしろ「信頼」を示す語であった。Liddell, Lewis, Oxford, Kluge, Littréなどを参照。

パウロは自ら明言するごとく¹⁾ 信仰の系譜は旧約聖書乃至ユダヤ教のそれを継承しているので、ローマ書をギリシヤ語を用いて(実は弟子に口述させた)ローマ在住のキリスト者たちに送った時、かれはギリシヤ語よりもヒブル語かアラム語で思索していたに違いない。そこで、*pistis* なるギリシヤ語は、LXXでどのようなヒブル語の訳であったか。そのことを Thayer, Smith, ことに Hatch を用いて調べて見ると、*pistis* は次のようなヒブル語の訳であること

が判る。

- a. *ēmūn*
- b. *emūnāh*
- c. *amānāh*
- d. *emeth*
- e. *āman*

【註1】 ガラテヤ書1章14. ピリピ書3章5などを参照。

以上のヒブル語の LXX における使用回数を示すと次のようになる。

emūnāh 20回 I Sam 26 : 23. II Ki 12 : 15 (16). 22 : 7. I Ch 9 : 22. 9 : 26. 9 : 31. II Ch 31 : 12. 31 : 15. 31 : 18. 34 : 12. Ps 32 (33) : 4. Pr 12 : 17. 12 : 22. Hos 2 : 20 (22). Hab 2 : 4. Jer 5 : 1. 5 : 3. 7 : 28. 9 : 3(2). Lam 3 : 23.

emeth 6回 Pr 3 : 3. 14 : 22. 15 : 27(16 : 6). Jer 35(38) : 9. 39(32) : 41. 40(33) : 6.

amānāh 2回 Neh 9 : 38(10 : 1). Ca 4 : 8?

ēmūn 1回 Deut 32 : 20.

āman 1回 Jer 15 : 18.

以上の五つのヒブル語の中、*ēmūn*, *emūnāh*, *amānāh*, *emeth* の四つは名詞であるが、*āman* は動詞である。この五つの語はいずれも同一語原に由来し、しかもヒブル語の一般原則に従えば *āman* なる動詞に由来すると考えられる。(但し、*āman* なる Kal の形ではほとんど用いられないで、Niphal その他の形で用いられるのが常であるが。) そこで、*pistis* と訳されたヒブル語名詞の意味と、それがヒブル語以外の語に訳された場合にどのような語として表現されたかと言うことについては後に論ずるとして、ここでは先ず、一応 *āman* なる動詞の意味を確かめ、次ぎに *āman* が他の国語への訳においてどのように訳されたかを検討したい。

āman なるヒブル語は、Köhli によれば元来、akkadisch¹⁾ 系の語原をその背景に持ち、セム語系のいくつかの語の中にそれと関連するものが見出せる。アラビア語の *amūnā* は、Hans Wehr²⁾ によると、*treu, zuverlässig sein* の意味である。アラム語の *hēmin* は Levy によると *etwas fest, für wahr halten* の意味から *trauen, ihm glauben* または *an etwas glauben, darauf vertrauen* の意味になったと言う³⁾。Ges によるとヒブル語の *āman*

は元来 fest, zuverlässig sein の意味であったが, Niphal の形で用いられると, 次のように用いられたと言う。(1) fest, sicher sein. (2) dauerhaft, beständig sein. (3) zuverlässig, treu sein. (4) wahr befunden werden. (5) einen Vertrauensposten erhalten. Köhler は āman の Niphal の形を二つにしか分類しないが (1) sich als fest, zuverlässig erweisen; zuverlässig, treu sein; Bestand haben, bleiben, dauernd, beständig. の意味と, (2) gewartet, betreut werden の意味とに理解する。

以上によって明白であるように, āman およびそれに関連する語の基本的な意味は, fest sein または zuverlässig sein と言うことである。それ故にこそ, 旧約聖書イザヤ書7章9節後半で「もしあなたがたが信じないならば, 立つことはできない」と書かれている句の中で, 「信じる」と「立つ」とが同一動詞の変化した形であることを理解することができる。すなわち, 「信じる」は thaaminū であり, 「立つ」は theāmēnū である。旧約聖書における āman なる動詞は, 単に「信じる」pisteuein, credere, glauben, believe などと, 必ずしも均一して訳されないのみならず, 他の非常に多種の言葉にも訳されたが, それはこの動詞が占めている語義の領域が驚くほど広いことを示していることになろう。換言すれば, 古代において, ヒブル語のような国語において, 数少ない言葉が多様の意味に用いられていた, ということになろう。そこで, 今日われわれが口語訳聖書において使用している訳語が最終的に正確な訳語であると言う意味ではけっしてないが, āman なる動詞がいかに多様な内容を含んでいたかを例証するために, 口語訳聖書における āman の訳語を, その使用回数に従って次ぎに示したい。なお, āman は旧約聖書全体で, 筆者が一つ一つ拾い上げた限りにおいては 110 回ほど用いられていることになる。

信じる 42回 創世 15 : 6, 45 : 26, 出エジ 4 : 1, 4 : 5, 4 : 8, 4 : 8, 4 : 9, 4 : 31, 19 : 9, 民数 14 : 11, 20 : 12, 申命 1 : 32, 9, 23, 士師 11 : 20, サム上 37 : 12, 王上 10 : 7, 王下 17 : 14, 代下 9 : 6, 20 : 20, 20 : 20, 32 : 15, ヨブ 9 : 16, 15 : 22, 詩篇 27 : 13, 78 : 22, 78 : 82, 105 : 12, 106 : 24, 116 : 10, 119 : 66, 箴言 14 : 15, 26 : 25, イザ 7 : 9, 28 : 16, 43 : 10, 53 : 1, エレ 12 : 6, 40 : 14, 哀歌 4 : 12, ヨナ 3 : 5, ミカ 7 : 5, ハバ 1 : 5

忠信なる者 7回 詩篇 12 : 1(2), 101 : 6, 箴言 11 : 13, 民数 12 : 7, イザ 1 : 21, 1 : 26, ネへ 9 : 8

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(3)

<u>真実な者</u>	7回	申命 7:9, 詩篇 19:7(8), 31:23(24), 78:37, イザ49:7, エレ 42:5, ホセ 11:12(12:1)
<u>忠実な者</u>	6回	民数 12:7, サム上 2:35, 22:14, ネヘ 13:13, 詩篇78:8, 箴言 25:13
<u>確か</u>	6回	サム上 25:28, 詩篇 93:5, 117:7, イザ8:2, 55:3 ダニ 2:45
<u>堅い</u>	4回	代下 17:23, 17:24, イザ 22:23, 22:25
<u>堅く立つ</u>	3回	代下 20:2, 詩篇 89:28(29), 89:37(38)
<u>確認する</u>	2回	王上 8:26, 代下 6:17
<u>久しい</u>	2回	申命 28:59, 28:59
<u>頼みとする</u>	2回	ヨブ 4:18, 12:20
<u>たよる</u>	2回	ヨブ 15:31, 39:12
<u>忠誠な者</u>	1回	サム下 20:19
<u>堅固</u>	1回	王上 11:38
<u>必ず起る事</u>	1回	ホセ 5:9
<u>定める</u>	1回	サム上 3:20
<u>絶えることがない</u>	1回	イザ 33:16
<u>(水が)なくて</u>	1回	エレ 15:18
<u>保つ</u>	1回	サム下 7:17
<u>忠義な者</u>	1回	サム上 22:14
<u>果す</u>	1回	代下 1:9
<u>ほんとう</u>	1回	創世 42:20
<u>まこと</u>	1回	箴言 27:6
<u>頼む者</u>	1回	ヨブ 12:20
<u>希望</u>	1回	ヨブ 29:24
<u>信を置く</u>	1回	ヨブ 15:15
<u>立ちとどまる</u>	1回	ヨブ 39:24
<u>望み</u>	1回	ヨブ 24:22
<u>立つ</u>	1回	イザ 7:9
<u>確立する</u>	1回	サム上 2:35
<u>おぼつかない</u>	1回	申命 28:66

なお、同じ aman なる動詞であるが、いささかその用法が転じて次のような訳語として表現されているものが、他に10回近くある。

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(3)

<u>守役</u>	2回	王下 10 : 1, 10 : 5
<u>養い育てる</u>	2回	ルツ 4 : 16, エス 2 : 7
<u>うば</u>	1回	サム下 4 : 4
<u>育てる</u>	1回	哀歌 4 : 5
<u>養い親</u>	1回	民数 11 : 12
<u>養父</u>	1回	イザ 49 : 23
<u>いただく</u>	1回	イザ 60 : 4

【註1】 Akkadisch (akkadian) はセム語中、バビロン、アスリア、メソポタミアなどの系統の語を指す。なお Klaus Beyer, *Semitische Syntax im Neuen Testament*. Bd I. S. 12, S. 19 その他を参照。

【註2】 Hans Wehr, *Arabisches Wörterbuch für Die Schriftsprache der Gegenwart*. 3 auflage. 1958.

【註3】 Syriac も大体において Aramaic とほぼ同じ意味に使用されているが、Smithなどを参照したい。なぜならば、ここで言う Aramaic は、セム語の中で Akkadian, Canaanite, Arabic, Ethionic などと並べられる Aramaic であるよりは、もう少し限定されたものであり、旧約聖書およびそれに関連する文献に出て来るものであって、Syriac とは兄弟のごとき関係にあるものを意味させたい。それ故に、この意味での Aramaic と Syriac とはきわめて近接した関係にあると理解する。

旧約聖書が紀元少し前に、ギリシヤ語に訳された時、āman は、Hatch によると、次のようなギリシヤ語に訳されたが、それを使用回数に従って次のように示したい。

pisteuein 52回 Gen 15 : 6. 42 : 20. 45 : 26. Ex 4 : 1. 4 : 5. 4 : 8. 4 : 8. 4 : 9. 4 : 31. 14 : 31. 19 : 9. Nu 14 : 11. 20 : 12. Deu 9 : 23. 28 : 66. Jud 11 : 28. IS 3 : 21(20). 27 : 12. IK 10 : 7. IIK 10 : 7. IIK 17 : 14. II Ch 9 : 6. 20 : 20. 20 : 20. 20 : 20. 32 : 15. Jb 4 : 18. 9 : 16. 15 : 15. 15 : 22. 15 : 31. 24 : 22. 29 : 24. 39 : 12. 39 : 24. Ps 26(27) : 13. 77(78) : 22. 77(78) : 32. 105(106) : 12. 105(106) : 24. 115 : 1 (116 : 10). 118(119) : 66. Pr 14 : 15. Jn 3 : 5. Hb 1 : 5. Is 7 : 9. 28 : 16. 43 : 10. 53 : 1. Jer 12 : 6. 47(40) : 14. La 4 : 12.

pistos 28回 Nu 12 : 7. Deu 7 : 8. 28 : 59. IS 2 : 35. 2 : 35. 3 : 20. 22 : 14. 25 : 28. IK 11 : 38. Neh 9 : 8. 13 : 13. Jb 12 : 20. Ps 18(19) : 7. 88(89) : 28. 88(89) : 37. 100(101) : 6. 110(111) : 7. Pr 25 : 13. Hos 5 : 9. Is 1 : 21. 1 : 26. 8 : 2. 22 : 23. 22 : 25. 33 : 16. 49 : 7. 55 : 3. Je 49(42) : 5.

pistoun 9回 IIS 7 : 16. IK 8 : 26. I Ch 17 : 23. 17 : 24. II Ch 1 : 9.

6 : 17. Ps 77(78) : 8. 77(78) : 37. 92(93) : 5.

tithēnos 6回 Nu 11 : 12. Ru 4 : 16. IIS 4 : 4. IIK 10 : 1. 10 : 5.
Is 49 : 23.

thelein 1回 Jud 11 : 20.

peithein 1回 Pr 26 : 25.

pistin ehein 1回 Jer 15 : 18.

threptos 1回 Es 2 : 7.

tithēnein 1回 La 4 : 5.

airein 1回 Is 60 : 4.

axiopistos 1回 Pr 27 : 6.

thaumastos 1回 Deu 28 : 59.

katapisteuēin 1回 Mic 7 : 5.

口語訳と LXX とを比較する場合、少なくとも二つ以上の点から見ねばならぬ。第一はそれぞれが用いられている回数であり、第二は、それぞれの使用個所がどの程度に一致しているかであり、さらに正確に考えれば、同一訳語であっても意味内容が相当相違することもあるわけである。ことに外国語の場合われわれはともすれば単純に一つの意味に受け取りやすいであろう。ここで、ギリシヤ語の *pisteuein* が、そのまま口語の「信じる」と一致するか否か、その *pisteuein* の中には「信頼する」とか「信用する」とか訳さるべき個所もあり得ると考えられる。それはそれとして、口語の「信じる」が42回に対して、LXX の *pisteuein* は52回で、かなり多くなっている。口語訳の「忠信なる者」「真実なる者」「忠実なる者」を合計すると20回になり、それにかなり近い意味であると一応は考えられる——と言ってもこれは必ずしも正確ではないが——LXX の *pistos* は28回で幾分増加している。さらに *pistoun* が9回、*pistin (ehein)* が1回、*axiopistos* が1回、*katapisteuēin* が1回あって、それを合計すると、11回になり、結果として見ると、LXX は口語訳に比較すると、ヒブル語の *āman* をかなり多く *pisteuein* の方向に傾けて理解し、そのように訳していると言える。ヒブル語本来の *fest sein* とか *zuverlässig sein* と言う意味は口語訳において「確か」「堅い」「堅く立つ」「確信する」「久しい」「頼みとする」「たよる」「堅固」「必ず起る事」「定める」「保つ」「果す」「ほんとう」「まこと」「頼む者」「希望」「信を置く」「立ちとどまる」「望み」「立つ」「確立する」などで現わされ、また「忠信なる者」「忠実なる者」「真実なる者」もその関連から理

解される。しかし、LXX において、そのような基本的な線を現わす語は、きわめて僅少である。

pisteuein を「信じる」“believe”, „glauben”などと訳すことは必ずしも不正確ではないがその内容をいささか正確にせねばそれが「信じる」と訳されても believe と訳されても glauben と訳されても、果して正確か否かは軽々しく断定はできない。pisteuein は Liddell によると本来は trust, put faith in, rely on a person, thing or statement の意味であって、そこから次ぎに believe that, feel confident that a thing is will be, has been の意味になった。すなわち、pisteuein なる語であっても、最初から「神の存在を信じる」と言うような意味で存在を確信すると言うことよりは、人に対して、あるいは言葉に対して、信用し、信頼を置くと言う、いわば人格的信頼の意味であった。このことはラテン語の credo にも当てはまり、その古い起源にある Sanscrit¹⁾ の crat, crad は trust することを意味していたので、ラテンの credo は元来商業語として多く用いられたことによっても明白なごとく、give as a loan, loan, lend, make or loan to anyone²⁾ の意味であったと Lewis は言う。Paul によると Glaube もまたラテンの credo とほとんど同じような意味であったとして次ぎのように書いている。Früher wurde G. als Lb. nach it, credito auch für „Kredit” gebraucht, als Lüs, von it ……ich habe G.=ich habe Kredit.³⁾ believe また Belief は Oxford によると、geleafa の短縮された形の leafa に由来し、次ぎのように言い現わす。The mental action, condition or habit, of trusting to or confiding in a person or thing; 故に、pisteuein (credere, glauben, believe の場合も同様に) が単に、神の存在を信じる、と言う場合の「信じる」の意味のみに限定されてはいないと言うことを十分に知った上で言うのであるが、それにしても āman がかなり多く pisteuein と訳されたことは事実である。

【註1】 Oxford Sanscrit Dictionary を参照。

【註2】 Lewis, A Latin Dictionary 参照。

【註3】 Kluge, „Glaube”, ags. gelēofa, belief. Als Faktitiv zu lieb hat glauben die Greendbed. „sich etw. lieb, vertraut machen” 参照。

LXX において pistis は āman 以外には emūnāh, emeth, amānāh, ēmūn の訳語として用いられていると、すでに述べたが、その使用回数の順序に従って一つずつ検討を加えたい。

ヒブル語の emūnāh は Ges によると次のように理解される。それは言う

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(3)

までもなく, aman なる動詞に由来し, (1) Festigkeit, Unbeweglichkeit, (2) Sicherheit, ungestörter Friede, (3) Wahrhaftigkeit, Zuverlässigkeit, Treue. Köhl はさらにこれを細かく分けて次のように理解する。(1) Unbeweglichkeit, Festigkeit. (2) Zuverlässigkeit. (3) Redlichkeit, (4) Treue. (以下は省略したい。) Ges も Köhl も emūnāh の理解の仕方はほとんど同じであって aman の fest sein, あるいは zuverlässig sein の意味をそのまま名詞にしたものと理解しているようである。これが, pistis として LXX で用いられたが, ある程度の距離がすでにできたことを誰も見逃し得ないであろう。参考までに, pistis と emūnāh が訳された個所を示し, ついで乍らラテン訳, ドイツ訳, イギリス訳, 口語訳をも掲げて置きたい。

個 所	Vulg	Luther	AV	口 語
I Sam 26 : 23	fidem	Glauben	faithfulness	真 実
II Ki 12 : 15(16)	in fide	auf Glauben	faithfully	正 直 に
22 : 7	in fide	auf Glauben	faithfully	正 直 に
I Ch 9 : 22	in fide	auf Glauben	in set office	職 に
9 : 26	creditus	auf Glauben	in set	つかさどった
9 : 31	frigebantur	waren vertraut	set office	つかさどった
II Ch 31 : 12	fideliter	treulich	faithfully	忠 実 に
31 : 15	fideliter	auf Treue	set office	忠 実 に
31 : 18	fideliter	treulich	set office	忠 実 に
34 : 12	fideliter	treulich	faithfully	忠 実 に
Ps 32(33) : 4	in fide	hält gewiss	in truth	真 実 だ
Pr 12 : 17	justitiae	wahrlich	truth	真 実
12 : 22	fideliter	treulich	truly	忠 実 な
Hos 2 : 20(22)	in fide	im Glauben	in faithfulness	真 実 を
Hab 2 : 4	in fide	Glaubens	by faith	信 仰
Jer 5 : 1	fidem	Glauben	truth	真 実
5 : 3	fidem	Glauben	truth	真 実
7 : 28	fides	Glauben	truth	真 実
9 : 3(2)	veritatis	Wahrheit	truth	真 実
Lam 3 : 23	fides	Treue	faithfulness	真 実

Vulg において fides は11回, Luther において Glaube は10回, AV において faith は僅か1回, 口語訳において「信仰」は1回用いられている。20回の pistis の中 Vulg と Luther が大体その半数を fides あるいは Glaube と訳し, AV と口語訳とは有名なハバクク書の個所のそれのみ僅か1回

faith および「信仰」と訳した⁹⁾。

【註1】 ハバク書この個所の emūnāh が「信仰」faith であるのか、それとも「真実」faithfulness であるのか、については今日なお学界で論争が継げられていて相当困難な問題がある。James Barr, *The Semantics of Biblical Language*. pp. 201-202 などを参照。

旧約聖書の emūnāh がそのまますべてギリシヤ語訳で pistis と訳されたのではなくて、emūnāh の五分の二が pistis と訳されたにすぎないことを、ここに明記したい。そのために emūnāh が LXX でどのような語に訳されたかを次ぎに示したい。

alētheia 22回

pistis 20回

alēthinos 2回

axiopistos 1回

nistos 1回

stérizein 1回

LXX において emūnāh が pistis と訳されるよりも、僅かでも多く、alētheia と訳されていたことには相応の注意を払わねばならぬ。(alētheia の意味については、emeth との関係でもう少し詳細に触れたい。) ついで乍ら、emūnāh の意味を今日理解する単に一つの手掛りとして、その語が口語訳でどのように訳されているかを次に示したい。もちろん、これは単なる参考であって、口語訳の理解の仕方が完全に正確である、と主張しているわけではない。

真実 (19回)、まこと (15回)、忠実 (4回)、堅く立つ (2回)、正直 (2回)、つかさどる (2回)、さがらない (1回)、信仰 (1回)、忠信 (1回)、安き (1回)、職に任ずる (1回)

ヒブル語の emeth は Ges によると次のように理解する。emeth は言うまでもなく、āman に由来し、(1) Beständigkeit, Bestand. (2) Zuverlässigkeit, Gewissheit, Sicherheit. (3) Als moral Eigensch: Zuverlässigkeit, Ehrlichkeit, Treue. (4) inbezug auf berichtete Tatsachen: Wahrheit. Köhl もほとんど全く Ges と同じように理解して次ぎのように emeth を分類している。(1) Festigkeit, Zuverlässigkeit, (2) Beständigkeit, (3) Treue. (4) Wahrheit. 以上によって明白にされているように、emeth がそのまま「信仰」とか Glaube とか faith とか言う語に訳される余地が全くないとは言えないにして

も、emeth 本来の意味は、āman が fest sein や zuverlässig sein であったように、やはり Festigkeit とか Zuverlässigkeit の線であるようである。それから派生して、分類の順序としては最も終りにやっと Wahrheit なる訳語で出て来る。(Wahrheit, truth, などの正確な意味については註を見てもらいたい¹⁹⁾。)

【註1】 研究社発行の新英和大辞典によって truth の項を見ると、「1. 真理, 真: scientific ~科学的真理……2. (事実に即した) 真実, 真相, 事実……(以下略)」と書かれていて、2の「真実」より前に1の「真理」が置かれている。これが truth なる語に対する一般人の常識であろう。次ぎに Oxford を見ると、かなり方向が異なっていて、そのIとしては The quality of being true. とし、IIとして Conformity with fact と規定し、最後にIIIとして Something that is true と書いている。Oxford より遅れて最近出版された OxfEty で truth を見ると、次ぎのように狭義に限定されている。quality of being true, faith, loyalty と。ここに true なる語が出たが、英語の true は OxfEty によると steadfast や trust-worthy の意味であったが、そこから Consistent with facts の意味に変わり、real とか genuine の意味になったのであって、ドイツ語の treu とも関連があると言う。Kluge によると、treu はインドゲルマン系の古語に由来し、Sicher, stark, fest などの意味をもつ語とも関連していたと言う。すると treu にしても、true にしても、少くとも語源的に言えば古代においては、ヒブル語の āman に近い意味であったことがわかる。フランス語の vérité は言うまでもなく、ラテン語の veritas にそのまま由来することが誰にでも判るが、vérité は Littré によると次のように説明されている。Qualité par laquelle les choses apparaissent telles qu'elles sont. Dire la vérité. On dit qu'un homme est la vérité même, pour exprimer qu'il est toujours fidèle à la vérité. 以下いろいろの意味に用法が述べられているが、それについては省略したい。話を元に戻してドイツ語の Wahrheit の形容詞又は副詞の形である wahr について Paul-Betz は次のように規定する。Zunächst bezieht sich w. auf eine Aussage oder eine Meinung und gibt an, dass dieselbe mit der Wirklichkeit übereinstimmt.……Von Personen und ihren Tätigkeiten ist es „Aufrechtig“.……ドイツ語の wahr がその古い形で、ラテン語の verus などと関連をもっていることは、Kluge が指摘している通りであって、英語の very とも関連していることは衆知のことである。そうになると、OxfEty が very を true と先ず説明し、次ぎに exact, precise, actual と書いたことは正に適切であると言えよう。それがまたフランス語の vérité と結びつくのである。そのように考えて来ると、truth, Wahrheit, vérité などと言って、それは元来、今日で言うところの抽象的な「真理」であるよりは、「真実」「ありのままのこと」「偽りのないこと」であり、これが人間関係に用いられるときには、「真実」であり「誠実」であったのである。

LXX において emeth が pistis と訳された箇所は 6 回しかないが、Vulg, Luther, AV, 口語訳を次ぎに示したい。

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(3)

	Vulg	Luther	AV	口 語
Pr 3:3	veritas	Treue	truth	ま こと
Pr 14:22	veritas	Güte	truth	ま こと
Pr 16:6	fidem	Treue	truth	ま こと
Jer 28:9	veritate	wahrhaftig	truly	真 実 に
Jer 32:41	veritate	treulich	assuredly	真実をもって
Jer 33:6	veritatis	Treue	truth	安 全

ヒブル語の emeth が LXX で pistis と訳された例は、このように比較的少く、さらに Vulg でそれが fides と訳された箇所は僅か1カ所しかなく、Luther, AV, 口語のいずれにおいても、Glaube, faith, 「信仰」の訳語は一つも見当たらない。

ヒブル語の emeth の意味について、すでに述べたが、試みに口語訳によってその訳し方を参考までに見ると、少くとも今日において emeth がどのように日本人によって読まれているかが判明する。そのことによって、emeth の正確な意味を規定しようとするのではなく、一応このように日本人によって理解されていると言うことを紹介するだけである。旧約聖書に emeth は 125 回位用いられているが、口語訳によって、その訳語をその回数順に示したい。

真実 52回 申命 13:14(15), 17:4, 22:20, ヨシ 2:14, 24:14, 士師 9:15, 9:16, 9:19, サム下 2:6, 7:28, 15:20, 王上 2:4, 10:6, 17:24, 22:16, 王下 20:3, 代下 9:5, 18:15, エス 9:30, 詩篇 15:2, 19:9(10), 51:6(8), 111:7, 111:8, 146:8, 箴言 8:7, 12:19, 22:21, 22:21, 伝道 12:10, イザ 16:5, 28:3, 42:3, 43:9, 48:1, 59:14, 59:15, 61:8, エレ 4:2, 6:5(4), 28:9, 32:41, エゼ 18:8, ダニ 8:26, 10:1, ホセ 4:1, ゼカ 7:9, 8:8, 8:16, 8:16, 8:19, ミカ 7:20,

誠, まこと 41回 創世 24:27, 24:49, 32:10(11), 出エジ 34:6, 代下 15:3, ネヘ 9:13, 詩篇 25:5, 25:10, 26:3, 30:9(10), 31:5(6), 40:10(11), 40:11(12), 43:3, 54:5(7), 57:3(4), 57:10(11), 61:7(8), 69:14(15), 71:22, 85:10(11), 85:11(12), 86:15, 89:14(15), 91:4, 108:4(5), 115:1, 117:2, 119:142, 119:151, 132:11, 138:2, 145:18, 箴言 3:3, 14:22, 14:24:16:6, 20:28, イザ 38:18, エレ 10:10, 42:5, マラ 2:6

真理 9回 詩篇 45:4(5), 86:11, 119:43, 119:160, 箴言 23:23,

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(3)

ダニ 8 : 12, 9 : 13, 10 : 21, 11 : 2

誠実 7回 創世 42 : 16, 47 : 29, 出エジ 18 : 21, サム上 12 : 24, 王上 3 : 6, ネヘ 9 : 33, エレ 23 : 28

忠実 3回 代下 31 : 20, 32 : 1, エゼ 18 : 9

確か 3回 ヨシ 2 : 12, 箴言 11 : 18, エレ 14 : 13

安全 3回 王下 20 : 19, イザ 39 : 8, エレ 33 : 6

忠信 2回 ネヘ 7 : 2, セカ 8 : 3

正しい 1回 創世 24 : 48

真心 1回 イザ 10 : 20

まことに 1回 エレ 26 : 15

よい 1回 エレ 2 : 21

この口語訳において、emeth がギリシヤ訳で（このことは後に示すが）alētheia と訳され、その他 Wahrheit や truth と多く訳されている中であって、「真理」なる訳語が9回であることを、いろいろな意味で注意したい。しかし、口語訳が、ヒブル語の emeth の本来の意味をかなり正確に把えて「真実」「誠、まこと」「誠実」「忠実」「確か」などと、圧倒的に多く訳していることを、われわれは相当高く評価してよい。

しかし、emeth がギリシヤ訳された時、それは次のような訳語として表現された。

alētheia 105回 Gen 24 : 27. 24 : 48. 32 : 10(11). 47 : 29. Deu 22 : 20. Josh 2 : 14. Jud 9 : 16. 9 : 19. ISam 12 : 24. IISam 2 : 6. 15 : 20. IKi 2 : 4. 3 : 6. 20 : 3. 20 : 19. 22 : 16. ICh 18 : 15. 32 : 1. Ne 9 : 1. 9 : 33. Ps 14(15) : 3. 24(25) : 5. 24(25) : 10. 25(26) : 3. 29(30) : 9. 30(31) : 5. 39(40) : 10. 39(40) : 11. 42(43) : 3. 44(45) : 4. 50(51) : 6. 53(54) : 5. 56(57) : 3. 56(57) : 10. 60(61) : 7. 68(69) : 13. 70(71) : 22. 84(85) : 10. 84(85) : 11. 85(86) : 11. 88(89) : 14. 90(91) : 4. 107(108) : 4. 110(111) : 7. 110(111) : 8. 113 : 9(115 : 1). 116(117) : 2. 118(119) : 43. 118(119) : 142. 118(119) : 151. 118(119) : 160. 131(132) : 11. 137(138) : 2. 144(145) : 18. 145(146) : 6. Pr 8 : 9. 11 : 18. 14 : 22. 20 : 28. 22 : 21. 29 : 14. Ece 12 : 10. Hos 4 : 1. Mi 7 : 20. Za 8 : 8. 8 : 16. 8 : 16. 8 : 19. Ma 2 : 6. Is 10 : 20. 16 : 5. 38 : 3. 42 : 3. 48 : 1. 59 : 14. 59 : 15. Je 4 : 2. 9 : 5. 14 : 13. 23 : 28. 33(26) : 15. DaLXX 8 : 26. 10 : 21. 11 : 2.

alēthinos 10回 Ex 34 : 6. IK 10 : 6. 17 : 2. ICh 9 : 5. 15 : 3. Ps 19 :

9. 86 : 15. Pr 12 : 19. Za 8 : 3. Je 2 : 21. DaTh 10 : 1.

dikaiosynē 6回 Gen 24 : 49. Josh 24 : 14. Is 38 : 19. 39 : 8. DaLXX¹⁸
: 12. 8 : 13. DaTh 8 : 12.

dikaiois 5回 Ex 18 : 21. Za 7 : 9. Is 61 : 8. Je 42 : 5. Ez¹⁸ 18 : 8.

alēthōs 3回 Deu 13 : 14(15). 17 : 4. DaTh 8 : 26.

alētheuein 1回 Gen 42 : 16.

pistos 1回 Pr 14 : 25.

eleēmosynē 1回 Is 33 : 18.

以上で明白にされたように、ヒブル語の emeth 126回の中105回が alētheia と訳され、他の6種類の訳語のものは僅か21回しかない。ついであるが、参考までに附言すると、AV において emeth は約120回の中 truth と訳されたものは89回であり、true が17回、truly が6回、faithfully が2回、assured, assuredly, faithfully, right, sure, verity がそれぞれ1回ずつになっている。すると、ギリシャ語の alētheia がそのまま英語の truth ではないにしても、truth の89回より alētheia の105回の方が幾分上廻っていることになる。ところが Luther において、emeth が Wahrheit と訳された場合がやはり相応多いが54回にとどまる。同じ emeth が Treu と訳された場合は25回である。この点において、emeth の訳し方に関する限り、AV は大体においてギリシャ語によく似ており、Luther は全く独自の理解によってそれを訳していることが判明した。すなわち、truth が AV に89回あるのに対して Wahrheit が Luther には54回しかないことは偶然とは考えられない。言うまでもなく、alētheia が邦語の「真理」にそのまま相応するわけではない。そのことは Wahrheit や truth がそのまま邦語の「真理」と全く同一ではないのと同じである。

Liddell によるとギリシャ語の alētheia は元来、lie あるいは mere appearance に oppose するところの truth であると言う。その場合の truth が「真理」と同一でないことは言うまでもなく、むしろ「事実」とか「実相」の意味であろう。それが、仮空なものに対して、事実上確かに存在するものとしての reality という意味になり、たとえば 戦闘の演習に対して実戦が reality であるような意味に用いられた。また 夢や空想のようなものに対して、具体的に実現された事柄を alētheia と呼んでいる。さらに、その語は人間に関して用いられた場合、すでに Herodotus の時でさえも、そして Aristoteles の場合などそうであるが、truthfulness や sincerity の意味に用い

られている。それ故に、alētheia がすべて抽象的な意味での「真理」の意味であると一方的に印象的判断を下すことは正しくなく、その中には以上述べたような意味がある程度まで含まれていることに留意すべきである。しかしヒブル語の emeth とギリシヤ語の alētheia とを比較する時、両者に共通の領域が相当あることはよく判るが、それにしても、重点の置き所がどこにあるかが問題になる。そのことは、近代のヨーロッパ語の Wahrheit, truth, vérité についても言えることであって、問題となる点が少くとも三つあるように思われる。(1)「真理」というような語で表現される抽象的な観念がどの程度あったか。(2) 事実存在しないものに対して「事実上確かに存在したこと」と言うような意味がどの程度あったか。(3)「真実」「誠実」「まごころ」と言うような語であらわされるような人間の心の状態がこの語にどの程度あったか。そのことについて、C. H. Dodd, *The Bible and the Greeks* の p. 71 以下からかれの意見を引用したい。

The Greek terms, therefore, have in their origin in common with the Hebrew words which they have employed to translate. The common ground would seem to lie in the application of both sets of terms to words or thoughts. These may be described as emeth if they are sure, certain, deserving of confidence, if they will stand investigation. They may be described as alētheia if they correspond with reality. But in the last resort, only such words and thoughts as correspond with reality are deserving of confidence. To this extent alētheia = emeth. But in the passage from the Hebrew emeth to the Greek alētheia there is a certain inevitable shift of meaning, which is sometimes negligible, but at other times may affect the substance of the matter. Alētheia exhibits a similar shift, or extension, of meaning. As we have observed, when emeth is used in relation to words or thoughts which are certain, or sure, it approximates to the meaning "truthfulness" and where it is used of persons, "trustfulness" may approximate to "sincerity" or "veracity". In such cases alētheia may be a fairly adequate translation.

LXX において pistis と訳されたヒブル語の amānāh と emūn とについては、その使用回数が2回と1回とであるので、ここで特に取り上げて論ずる必要は余りないように思うので、それについての検討は割愛したい。

LXX の用法がそのまま機械的に新約聖書ギリシヤ語の用法を決定したわけではないが、新約聖書ギリシヤ語を理解する時に、他のいかなる文献にもまして、LXX の影響が甚大であることに疑いを挿しはさむ者はない筈である。それ故に、新約聖書用語を理解するためには、一応 LXX の用法を検討して置かねばならぬので、かなり曲りくねった話のようであるが *pistis* の用法をそのような角度から見て来た。しかし、いわば本論に入るとも言うべき段階として、新約聖書における *pistis* の用法について検討を加えたい。

この場合直ちに *pistis* を論じ始めてもよいのではあるが、旧約で *pistis* を検討する時、*aman* なる動詞形から始めたので、それに平行させる意味もいくらかあるので、*pistis* を研究する前に動詞の形である *pisteuein* を取り上げたい。

Schmoller¹⁾ に従って *pisteuein* を分類すると、大きく分けて I と II になりさらに I を a, b, c, d の四つに小さく分ける。I をかれは *confidere, fidem habere* と規定し、II をそれとかなり明確に区別して *committtere alicui alliquid* とする。I の a を *absolute, — cum accusativo, — peri tinis, — pisteuō hoti, — cum infinitivo, — cum passivo* の意味に分類し、これに次のような個所を掲げている。

Matt 8 : 13. 9 : 28. 21 : 22. 24 : 23. 24 : 26. Mk 5 : 36. 9 : 23. 9 : 23. 9 : 24. 9 : 42. 11 : 23. 11 : 24. 13 : 21. 15 : 32. 16 : 16. 16 : 16. Luk 1 : 45. 8 : 12. 8 : 13. 8 : 50. 22 : 67. Joh 1 : 7. 1 : 50. 3 : 12. 3 : 12. 3 : 15. 3 : 18. 3 : 18. 4 : 41. 4 : 42. 4 : 48. 4 : 53. 5 : 44. 6 : 36. 6 : 47. 6 : 64. 6 : 64. 6 : 69. 8 : 24. 9 : 18. 9 : 38. 10 : 25. 10 : 26. 11 : 15. 11 : 26. 11 : 27. 11 : 40. 11 : 42. 12 : 39. 13 : 19. 14 : 10. 14 : 10. 14 : 29. 16 : 27. 16 : 30. 16 : 31. 17 : 8. 17 : 21. 19 : 35. 20 : 8. 20 : 25. 20 : 29. 20 : 31. 20 : 31. Ac 2 : 24. 4 : 4. 4 : 32. 8 : 13. 9 : 26. 11 : 21. 13 : 12. 13 : 39. 13 : 41. 13 : 48. 15 : 5. 15 : 7. 15 : 11. 17 : 12. 17 : 34. 18 : 8. 18 : 27. 19 : 2. 19 : 18. 21 : 20. 21 : 25. 26 : 27. Rm 1 : 16. 3 : 22. 4 : 11. 4 : 18. 6 : 8. 10 : 4. 10 : 9. 10 : 10. 10 : 14. 10 : 14. 13 : 11. 14 : 2. 15 : 13 I Cor 1 : 21. 3 : 5. 11 : 18. 13 : 7. 14 : 22. 14 : 22. 15 : 2. 15 : 11. (15 : 23). II Cor 4 : 13. Gal 3 : 22. Eph 1 : 13. 1 : 19. I Thes 1 : 7. 2 : 10. 2 : 13. 4 : 14. II Thes 1 : 10. I Tim 3 : 16. Heb 4 : 3. 11 : 6. Jac 2 : 19. I Pet 2 : 7. I Joh 4 : 16. 5 : 1. I Joh 5 : 5. Jud 5.

【註1】 Schmoller Handkonkordanz zum griechischen Neuen Testament.

以上中, Vulg において, *pisteuein* はほとんど *credere* と訳されているが *fidelibus* なる訳が2回用いられている⁷⁾。それは I Cor 14 : 22. 14 : 22. である。Luther において *pisteuein* はほとんど *glauben* と訳されるが, *gläubig* なる形がいくらかある。すなわち, Ac 2 : 44. 4 : 4. 4 : 32. 11 : 21. 13 : 41. 15 : 5. 17 : 34. 18 : 8. 18 : 27. 19 : 2. 19 : 18. 21 : 20. 21 : 25. Rm 13 : 11. I Cor 3 : 5. 14 : 22. 14 : 22. Eph 1 : 13. I Thes 1 : 7. 2 : 10. で20回ある。それに次いで名詞の *Glaube* と訳された形が僅か1回ある。すなわち Joh 20 : 31. である。AV は例外なく *believe* と訳し, Peshitta も例外なく *haimen* と訳した。但し, 口語訳はほとんど「信じる」と訳したが, 「信者」(使徒行 2 : 44, 18 : 27, 19 : 18, 21 : 20, 21 : 25, コリント I 14 : 22, 14 : 22, テモ I 1 : 7, 2 : 10, 以上9回), 「信仰」(使徒行 15 : 5, 19 : 2, ロマ 15 : 3, コリ I 3 : 5, ユダ 5 の5回), 「より頼む」(ペテ I 2 : 7 の1回) などかなり多様の訳を試みている。

【註1】 Concord では不十分であるので Vulg のテキストによって, 一つ一つ拾ねばならぬ。

【のbに該当するとされる個所は次のごとくである。

Mt 21 : 25. 21 : 32. 21 : 32. 21 : 32. Mk 11 : 31. 16 : 13. 16 : 14. Lk 1 : 20. 20 : 5. Joh 2 : 22. 4 : 21. 4 : 50. 5 : 24. 5 : 38. 5 : 46. 5 : 47. 5 : 47. 6 : 30. 8 : 31. 8 : 45. 8 : 46. 10 : 37. 10 : 38. 12 : 38. 12 : 38. 12 : 38. 14 : 11. Ac 5 : 14. 8 : 12. 16 : 34. 18 : 8. 24 : 14. 26 : 27. 27 : 25. Rm 4 : 3. 4 : 17. 10 : 14. 10 : 16. II Th 2 : 11. 2 : 12. II Ti 1 : 12. Tit 3 : 8. I Joh 3 : 23. 4 : 1. 5 : 10.

以上の中で Vulg において *pisteuein* は例外なく *credere* と訳され, Luther においてそれは大体 *glauben* と訳されたが, *gläubig* が Ac 16 : 34 と Tit 3 : 8 と2回用いられている。AV は *believe*, Peshitta は *haimen*, 口語は「信じる」のみである。

【のcに分類される個所は次のごとくである。

Mt 18 : 6. Joh 1 : 12. 2 : 11. 2 : 23. 3 : 16. 3 : 18. 3 : 36. 3 : 36. 4 : 39. 6 : 29. 6 : 35. 6 : 40. 7 : 5. 7 : 31. 7 : 36. 7 : 39. 7 : 48. 8 : 30. 9 : 35. 9 : 36. 10 : 42. 11 : 25. 12 : 11. 12 : 36. 12 : 42. 12 : 44. 12 : 46. 14 : 1. 14 : 12. 16 : 9. 17 : 20. Ac 10 : 43. 14 : 23. 19 : 4. Rm 10 : 14. Gal 2 : 16. Phil 1 : 29. I Pet 1 : 8. I Joh 5 : 10. 5 : 13.

以上の中で, 例外的な訳としては Luther が Ac 14 : 23 で1回だけ *gläu-*

big を用いていることを指摘したい。

【のdとしては次の個所がある。Mt 27:42. Mk 1:15. Lk 24:25. Joh 3:15. Ac 9:42. 11:7. 16:31. 22:19. Rm 4:5. 4:24. 9:33. 10:11. I Ti 1:16. I Pet 2:6.

以上の中で、例外的な訳として、Luther は Ac 9:42 と 11:17 との2回 gläubig を用い、口語訳は ロマ 9:33 とペテロ I 2:6 との2回「より頼む」と訳している。

Ⅱ に分類されている個所は以下のごとくであるが表にして示したい。

	Vulg	Luther	AV	Peshitta	口語
Lk 16:11	credet	anvertrauen	commit to...trust	haimen	任せる
Joh 2:24	credebat	vertraute...an	commit unto	haimen	任せる
Rm 3:2	credita sunt	anvertraut	was committed unto	haimen	委ねる
I Cor 9:17	credita est	befohlen	is committed unto	haimen	ゆだねる
Gal 2:7	creditum est	anvertrauen	was committed unto	haimen	委ねる
2:7	creditum est	anvertrauen	was committed unto	haimen	委ねる
I Th 2:4	crederetur	zu betrauen	put in trust	haimen	託する
I Ti 1:11	creditum est	anvertraut ist	was trusted to	haimen	委ねる
Tit 1:3	credita est	anvertraut ist	is committed unto	haimen	委ねる

以上、新約聖書全体に用いられた pisteuein 243回を訳語に従ってわけると次のようになる。但し括弧の中は回数を示す。

Vulg	Luther	AV	Peshitta	口語
credere (241)	glauben (205)	believe (235)	haimen (243)	信じる (218)
fidelis (2)	gläubig (28)	commit (to trust) (6)		信者 (9)
	Glaube (2)	put in trust (1)		ゆだねる (6)
	vertrauen (6)	trust to one's trust (1)		より頼む (3)
	betrauen (1)			信仰 (4)
	befehlen (1)			託す (1)

上記のように pisteuein の訳語を総括すると次のようなことが言えそうである。第一に Vulg はほとんど完全に pisteuein を credere と訳した。但し、credere の変化した形が II の個所に用いられていて、その意味は相当に相違しているが、credere なる語の変化した形である点から見れば、ほとんど完全に統一したと言える。Luther の glauben と gläubig と Glaube

とを合計すると、AV の believe の数になるので、pisteuein に関する限り Luther と AV とは、大体同じような訳し方をしていえると言えよう。口語訳で「信じる」「信者」「信仰」を合計すると 231 となるが、これも大同小異であると言えよう。これに「より頼む」の 3 回を加えると、234 になる。そこで、口語訳としては、「より頼む」とか、それと同種の表現がもう少し多くあってもよさそうであるが、「より頼む」は 2 回用いられたにすぎなかった。この意味で、II に Schmoller が分類した数ヶ所は別として、I に分類されている個所において、pisteuein は Vulg でも Peshitta でも Luther でも AV でも、大体一貫した訳語を用いたと言ってよかろう。その限りにおいて、pisteuein がラテン語、ドイツ語、英語などに訳された場合、その表面にあらわれた上で、訳語の屈折はほとんど見られないかのごとくである。しかし問題は、その背後にあるのであって、そのことは名詞としての pistis の項で次ぎに論ずる時に取り上げたい。

新約聖書における pistis は、LXX における pistis とかなり相違して訳語上はほとんど問題がないかのように見えるが、一応 Schmoller に従って、その個所について一つ一つ当り、Vulg, Luther, AV, Peshitta, 口語訳などを検討して見たい。かれは、pistis を I と II とに二分し次のように理解する。
I. Sine coniunctione casus et cum genitivo subiectivo (sine obiectivo). と
II. Cum obiecto fidei, sive in genitivo, sive cum eis, en, epi, pros. 但し、I と II とでは本質的な区別がその意味にあるわけではない。

I の個所は次のごとくである。

Mt 8 : 10. 9 : 2. 9 : 22. 9 : 29. 15 : 28. 17 : 20. 21 : 21. 23 : 23. Mk 2 : 5.
4 : 40. 5 : 34. 10 : 52. 11 : 22. Lk 5 : 20. 7 : 9. 7 : 50. 8 : 25. 8 : 48. 17 : 5.
17 : 6. 17 : 19. 18 : 8. 18 : 42. 22 : 32. Ac 3 : 16. 6 : 5. 6 : 7. 11 : 24. 13 :
8. 14 : 9. 14 : 22. 14 : 27. 15 : 9. 16 : 5. 17 : 31. Rm 1 : 5. 1 : 8. 1 : 12. 1
: 17. 1 : 17. 3 : 3. 3 : 25. 3 : 27. 3 : 28. 3 : 30. 3 : 30. 3 : 31. 4 : 5. 4 : 9.
4 : 11. 4 : 12. 4 : 13. 4 : 14. 4 : 16. 4 : 16. 4 : 19. 4 : 20. 5 : 1. 5 : 2. 9 : 30.
9 : 32. 10 : 6. 10 : 8. 10 : 17. 11 : 20. 12 : 3. 12 : 6. 14 : 1. 14 : 22. 14 : 23.
14 : 23. 16 : 26. I Cor 2 : 5. 12 : 9. 13 : 2. 13 : 13. 15 : 14. 15 : 17. 16 : 13.
II Cor 1 : 24. 1 : 24. 4 : 13. 5 : 7. 8 : 7. 10 : 15. 13 : 5. Gal 1 : 23. 3 : 2. 3
: 5. 3 : 7. 3 : 8. 3 : 9. 3 : 11. 3 : 12. 3 : 14. 3 : 23. 3 : 23. 3 : 24. 3 : 25. 5
: 5. 5 : 6. 5 : 22. 6 : 10. Eph 2 : 8. 3 : 17. 4 : 5. 4 : 13. (4 : 29). 6 : 16. 6
: 23. Phil 1 : 25. 2 : 17. 3 : 9. Col 1 : 4. 1 : 23. 2 : 7. I Th 1 : 3. 1 : 8. 3

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(3)

: 2. 3 : 5. 3 : 6. 3 : 7. 3 : 10. 5 : 8. II 1 : 3. 1 : 4. 1 : 11. 3 : 2. I Ti 1 : 2. 1 : 4. 1 : 5. 1 : 14. 1 : 19. 1 : 19. 2 : 7. 2 : 15. 3 : 9. 4 : 1. 4 : 6. 4 : 12. 5 : 8. 5 : 12. 6 : 10. 6 : 11. 6 : 12. 6 : 21. II Ti 1 : 5. 1 : 13. 2 : 18. 2 : 22. 3 : 8. 3 : 10. 4 : 7. Tit 1 : 1. 1 : 4. 1 : 13. 2 : 2. 2 : 10. 3 : 15. Philem 6. Heb 4 : 2. 6 : 12. 10 : 22. 10 : 38. 10 : 39. 11 : 1. 11 : 3. 11 : 4. 11 : 5. 11 : 6. 11 : 7. 11 : 7. 11 : 8. 11 : 9. 11 : 11. 11 : 13. 11 : 17. 11 : 20. 11 : 21. 11 : 22. 11 : 23. 11 : 24. 11 : 27. 11 : 28. 11 : 29. 11 : 30. 11 : 31. 11 : 33. 11 : 39. 12 : 2. 13 : 7. Jac 1 : 3. 1 : 6. 2 : 5. 2 : 14. 2 : 14. 2 : 17. 2 : 18. 2 : 20. 2 : 22. 2 : 24. 2 : 26. 5 : 15. IPet 1 : 5. 1 : 7. 1 : 9. 5 : 9. IIPet 1 : 1. 1 : 5. I Joh 5 : 4. Jud 3. 20. Ap. 2 : 19. 13 : 10.

II の個所は次のごとくである。

Mk 11 : 22. Ac 3 : 16. 20 : 21. 24 : 24. 26 : 18. Rm 3 : 22. 3 : 26. Gal 2 : 16. 2 : 16. 2 : 20. 3 : 22. 3 : 26. Eph 1 : 15. 3 : 12. Phil 1 : 27. 3 : 9. Col 1 : 4. 2 : 5. 2 : 12. I Th 1 : 8. II Th 2 : 13. IITi 3 : 15. Phm 5. Heb 6 : 1. Jac 2 : 1. Ap 2 : 13. 14 : 12.

Vulg において、pistis は例外なく一律に fides と訳されている。Luther においてほとんど全く pistis は Glaube と訳されているが、例外として glauben なる動詞の形に訳された個所が、Heb 4 : 2 と 10 : 39 との 2 回ある。さらに pistis が Treue と訳された個所が、ITim 5 : 12 Tit 2 : 10 との 2 回ある。AV において、pistis は原則的には faith でほとんど統一されているが、ドイツ語 glauben なる動詞とよく似て、believe なる形が、Heb 10 : 39 と Rm 3 : 26 との 2 回ある。また belief (II Th 2 : 13), assurance (Ac 17 : 31), fidelity (Tit 2 : 10) がそれぞれ、1 回ずつある。Peshitta において、もし筆者の不用意な見落しがないとすれば（万々間違いはない筈であるが）それは haimanuta なる名詞で統一されている。最後に、口語訳であるが、7 種類の邦語に訳されている。

信仰 141 回を数えたが、その個所は「信仰」以外の六種の訳語の個所を全体から差し引いた個所である。

信じる 7 回 マタイ 21 : 21, マルコ 11 : 22, ロマ 3 : 26, ガラ 2 : 16 a. 2 : 16 c. 3 : 2. 3 : 5.

真実 2 回 ロマ 3 : 3, テトス 2 : 10

忠実 2 回 マタイ 23 : 23, ガラ 5 : 22

確証 1 回 使徒行 17 : 31

信徒 1回 テトス 3:15

誓い 1回 テモ I 5:12

ここで口語訳において「信仰」が141回に対し、それ以外の訳語が14回、すなわち1割あることは、いくらか問題性を感じさせる。すなわち、pistis を単に「信仰」一つの語に統一し切れない内容がすでに pistis の中に含まれていて、それが端しなくも、あらわされたように思われる。Luther が pistis をほとんど Glaube と訳しながらも、僅か2回ではあるが Treue なる語を採用したことも、何か問題が pistis の中に含まれているように感じられる。むしろ、pistis が Vulg で fides と Peshitta において haimanuta と一糸乱れず完全に統一されていることに、問題と言えれば問題があるように思われる。そのことは、新約における pistis なる語を研究するのみではなく、もう一度旧約の背景に戻って pistis を見直すときに問題が出て来るのではないか、と思われる。

Kittel の ThWNT の pistis の項を見るとその語は一方では旧約及びユダヤ教における信仰の性格を伝統的に受け継ぐと共に他方では Kērygma とか「神の言」とか Heils-geschichte に対する信仰をもあらわして、二重の構造をもっていたと説明する。(Bd VI. S. 216 などを参照) また、Schlatter もその著 Der Glaube im Neuen Testament S. 573 以下において、LXX の pistis が āman, emūnāh, emeth などとの関係を論じ、pistis は alētheia と不可分の関係にあることを論じている。すなわち次のように言う。Es ist nicht bedeutungslos, dass pistis ein Hauptbegriff in der Sprache der griechischen Judenschaft geworden ist; es verhielt sich zur jüdischen Sprache doppelseitig, gebend und empfangend. …… Es (emeth) war dadurch nicht mehr bloss als Eigenschaft am Vorstellungslauf der logischen Sphäre zugeeilt;

そこで、われわれは新約聖書における pistis を論ずる時、alētheia をも平行して取り上げねばならぬと思う。

alētheia は新約聖書において、次のような個所に使用されており、その Vulg, Luther, AV, Peshitta, 口語などの訳をも一つ一つ検討して見たい。
Mt 22:16. Mk 5:33. 12:14. 12:32. Lk 4:25. 20:21. 22:59. Joh 1:14. 1:17. 3:21. 4:23. 4:24. 5:33. 8:32. 8:32. 8:40. 8:44. 8:45. 8:46. 14:6. 14:17. 15:26. 16:7. 16:13. 16:13. 17:17. 17:17.

17 : 19. 17 : 37. 17 : 37. 18 : 38. Ac 4 : 27. 10 : 34. 26 : 25. Rm 1 : 18. 1 : 25. 2 : 2. 2 : 8. 2 : 20. 2 : 20. 3 : 7. 9 : 1. 15 : 8. I Cor 5 : 8. 13 : 6. II Cor 4 : 2. 6 : 7. 7 : 14. 7 : 14. 11 : 10. 12 : 6. 13 : 8. 13 : 8. Gal 2 : 5. 2 : 14. (3 : 1). 5 : 7. Eph 1 : 13. 4 : 21. 4 : 24. 4 : 25. 5 : 9. 6 : 14. Phil 1 : 18. Col 1 : 5. 1 : 6. II Th 2 : 10. 2 : 12. 2 : 13. I Ti 2 : 4. 2 : 7. 2 : 7. 3 : 15. 4 : 3. 6 : 5. II Ti 2 : 15. 2 : 18. 2 : 25. 3 : 7. 3 : 8. 4 : 4. Tit 1 : 1. 1 : 14. Heb 1 : 26. Jac 1 : 18. 3 : 14. 5 : 19. I Pet 1 : 22. II Pet 1 : 12. 2 : 2. I Joh 1 : 6. 1 : 8. 2 : 4. 2 : 21. 2 : 21. 3 : 18. 3 : 19. 4 : 6. 5 : 6. II Joh 1. 1. 2. 3. 4. III Joh 1. 3. 3. 4. 8. 12.

以上108回ほどの個所で、alētheia は Vulg において、ほとんど veritas と訳されたが、僅か2回だけ、Lk 22 : 59 と Ac 4 : 27 とで vere と訳された。それは Luther において最も多く Wahrheit と訳されたが、recht が4回 (Mt 22 : 16. Mk 12 : 14. Lk 20 : 21. Rm 2 : 2), Wahr が3回 (Rm 2 : 2. II Cor 7 : 14. 7 : 14), Wahrlich が3回 (Lk 22 : 59. Rm 11 : 18. 11 : 25), Wahrhaftigkeit が1回 (Rm 15 : 8), Wahrlich recht が1回 (Mk 12 : 32), 用いられている。AV において、ほとんど全く truth と訳されたが、true と1回 (Eph 4 : 24), truly と1回 (Lk 20 : 21), verity と1回 (I Ti 2 : 7) 訳されている。Peshitta において——一つ一つそのテキストによって注意深く拾ったのではあるが、Peshitta の concordance を手許に持たないので、あるいは見落としがあるかも知れない——shrārā¹⁾ が78回、qūstāh²⁾ が28回用いられている。口語訳において、最も多く用いられたのは「真理」³⁾ で80回ある。次に「真実⁴⁾」が14回、「まこと⁵⁾」が5回「ほんとう⁶⁾」が4回、「真⁷⁾」が1回、「ありのまま⁸⁾」が1回、「確か⁹⁾」が1回、「正しく¹⁰⁾」1回、「よく¹¹⁾」が1回である。

【註1】 Shrārā は Syriac で、shar なる動詞は to be strong, get well (Smith による) である。名詞としては truth, confirmation, sanction の意味である。これと姉妹語である Aramaic で Shrirūthā は Levy によると Festigkeit, Wahrheit であって、ヒブル語の Shriruth と同一系統の語である。

【註2】 qūstāh も Syriac であって、Smith によると、truth, right, justice, rectitude の意味であって、その姉妹語である Aramaic では Levy によると同じく qūstāh であり、Festigkeit, Geradheit, Wahrheit, Recht, Richtigkeit の意味である。

【註3】 「真理」マタ22 : 16, マル12 : 14, ルカ20 : 21, ヨハ3 : 21, 5 : 33, 8 : 32, 8 : 40, 8 : 44, 8 : 45, 8 : 46, 14 : 6, 14 : 17, 15 : 26, 16 : 7, 16 : 13, 17 : 17, 17 : 19, 18 : 38, ロマ1 : 18, 1 : 25, 2 : 20, コリ I 13 : 6, コリ II 4 : 2, 13 : 8, ガラ3 : 1, 5 : 7, エペ4 : 21, 5 : 9, 6 : 14, コロ1 : 5, テサ II 2 : 10, 2 : 12, 2 :

訳語によって起る新約聖書用語の屈折について(3)

13, テモ I 2:4, 2:7, 2:7, 3:15, 4:3, 6:5, テモ II 2:15, 2:18, 2:25, 3:7, 3:8, 4:4, テト I 1:1, 1:14, ヘブ 10:26, ヤコ 1:18, 3:14, 5:19, ペテ I 1:22, ペテ II 1:12, 2:2, ヨハ I 1:6, 1:8, 2:4, 2:21, 2:21, 3:19, 4:6, 5:6, ヨハ II 1, 1, 2, 3, 4, ヨハ III 1, 3, 3, 4, 8, 12

【註4】 「真実」使徒行 26:25, ロマ 3:7, 9:1, 15:8, コリ I 5:8, コリ II 6:7, 7:14, 7:14, 11:10, エペ 4:25, ビリ 1:18, テモ I 2:7, ヨハ I 3:18, ヨハ II 1, ヨハ III 1

【註5】 「まこと」ヨハ 1:14, 1:17, 4:23, 4:24, 使徒行 4:27

【註6】 「ほんとう」マル 13:32, ヨハ 16:7, 使徒行 10:34, コリ II 12:6

【註7】 「真」エペ 4:24

【註8】 「ありのまま」マル 5:33

【註9】 「確か」ルカ 22:59

【註10】 「正しく」ロマ 2:2

【註11】 「よく」ルカ 4:25

ここで、Peshitta なるセム語系の Syriac の表現が、shṛārā と qūštā との二つに分れてはいるが、いずれも、「真理」と完全に一致する語ではなくことに qūštā の第一義が Festigkeit であることには十分注意を払わねばならぬ。また shṛārā にしても、その動詞の形は元來 to be strong であって、名詞としては confirmation の意味での truth である。これに比較すると、Vulg はラテン語であるので、2回だけ vere と訳したにしても、ほとんど完全に veritas で統一した。次に AV. には verity の語が1回あるが、これは veritas と全く同一であり、true や truly の訳もあるが、ほとんど全く truth で統一した。ドイツ語の Wahrheit, 英語の truth などが、邦語の「真理」と同一ではないと前に述べたが、それにしても、今日的のセンスでは多くの人人は Wahrheit や truth を邦語の「真理」とかなり同一意味に読み込むかも知れない。それ故にこそ、口語訳には、「真理」以外に8種類の訳語を設けたのであろう。しかし、「真理」と訳された個所でも、「真理」よりは「真実」あるいは「ありのまま」とか「事実」とでも訳した方が一層適切であると思われる場合が少くない。

ヨハネ 3:21「真理を行っている者」なる句があるが、「真実を実行する者」のことであるまいか。勿論、この「真理」も「真実」も単に倫理的な意味でのものではなくて、イエス、キリストにおける神の啓示の内容を示している。ヨハネ 14:17の「真理の御霊」なる表現も、イエス・キリストを神の御子として啓示する意味での alētheia ではあるが、イエス・キリストにこそ神の「真実」が啓示されている、と言う意味で、「真実」でもあり「真理」でもある。ヨハネ 18:38はピラトが法廷でイエスに向かって質問した

言葉であるが、「真理」とは何であるか、と問うたピラトの質問は哲学者のそれのようである。案外、「事実」はどうであるのか、と尋ねたのではないかも想像される。ヨハネ II 4 などに「真理の中を歩いて」なる表現があるが日常的に言えば、「真実をもって生活する」の意味であるかも知れない。ヨハネ III 3 の「真理に生きる」も同様の表現であるかも知れない。勿論その「真実」は単に倫理的の真実のみではない。

旧約聖書およびユダヤ教において、「真実」と「信仰」とは同一語であった。少くとも同一語から出た語であって、不可分の関係にあった。これが、ギリシャ語に訳され、さらにラテン語、その他ヨーロッパ系の言葉で *pistis* とか *fides* とか、*Glaube* とか、*faith* とか訳された。新約聖書が、今日のテキストの現行の形として、ギリシャ語で書かれて、「信仰」を *pistis* と表現した時、すでに、旧約聖書的な表現の仕方は、したがって、その思想形式は *pistis* と *alētheia* との二つに断ち切られた。しかも、*alētheia* は特にセム語系の意味で理解されるよりは、ヘレニズムの世界で使用された意味に受け取られ易くなり、それが *veritas* になって行った¹⁾。

【註1】 ThWNT Bd I S 242 以下において原始教会における *alētheia* の内容は次のように分類されている。

1. *alētheia* als das, was Bestand hat und gilt (im Sinne von *emeth*).
2. *alētheia* als das, worauf man sich verlassen kann (im Sinne von *emeth*).
3. *alētheia* der (erschlossenen) wirkliche Tat bestand (im griechischen Sinne).
4. *alētheia* als Wahrheit der Aussage begegnet in der Wendung *rhema alētheias*.
5. *alētheia* als die rechte Lehre, der rechte Glaube.
6. *alētheia* als Echtheit, göttliche Wirklichkeit, Offenbarung (der johanische Sprachgebrauch).

パウロは、ハバクク書 2 章 4 節、口語訳で「しかし義人はその信仰によって生きる」と訳した言葉を引用した。それは新約聖書の信仰の本質を語る時かなり重要な句になった。しかも、この「信仰」は、*emūnāh* なるヒブル語が LXX で *pistis* と特に訳された唯一の箇所である。その事実を公平に検討する時、*pistis* 一語についての理解は一般の人人が常識でいとも簡単に受け取っている程、けっして容易ではあるまい。

[1968. 9. 19 稿]

Study in the Refraction Found in New Testament Translations (3)

KUNIO KATO

The writer presupposes there should have been some refraction, so he should like to call it, of the meanings of words in the process of translating the New Testament in Greek into other versions as Latin, German, French and English which belong to the western group of European languages on the one hand and Syriac which belongs to the eastern group on the other. For some years the writer, beginning with the studies in the Hebrew, Syriac, and Arabic versions, has tried to investigate the process of so-called refraction which he can find in Latin, French, German, English, Syriac, and Japanese Versions. In the papers he has published before, he has discussed the original meanings of words such as *aeon*, *nomos*, *metanoia*, *thanatos*, *mnemein*, *egeirein*, *eirene*, and *zoe* which he had selected from the *kerygma* of the primitive church, according to C. H. Dodd's theory on it.

Here in this paper, he tries to restore the original meaning of the words, *pistis* and *aletheia*, beginning with the study in the semitic meanings of them.

On Cid Corman's Style

Yorifumi YAGUCHI

1. The preface
2. The omission
 - (a) The omission of the subject and the predicate verb
 - (b) *The omission of the subject*
 - (c) The omission of the verb
 - (d) The omission of the signs
3. The unusual combination
4. The word order
 - (a) The inversion
 - (b) The insertion